

未刊初期洒落本『好色残香草』紹介

小林 勇

標題の書をここに紹介したい。本書について従来紹介されたものは、恐らく随分以前に本書がある古書肆の目録に登載されたときの文章のみであろう。その時の文章を次に引用しておく。

享保十四年（一七二九）写。『国書総目録』未載の、江戸時代前期頃の遊里をめぐる風俗を描いた浮世草子。

縦三〇・〇糎、横二一・五糎の大本。全三十一丁。原表紙に「好色残香草 全」の外題が書かれている。内題は「好色残香草」。序は「梅月堂」による。本文は毎半葉九行、毎行約十五〜十七文字の平仮名漢字交じり。巻末には「享保十四年西九月吉辰 梅澤氏作書（花押）」の奥書がある。序の「梅月堂」・奥書の「梅澤氏」とも未詳。

遊里で遊ぶ客の心得を説くかたちで、和歌などの古典の知識を持ち出したり、話し言葉を交えたりしながら、傾城（遊女）と客の風俗を面白おかしく描いている。傾城が指を切る風習や、老いばれ男が遊里通いに溺れてしまう様子など、当時の風俗を知るうえでも興味深い。

これまで知られていない浮世草子として、大変珍しい資料。全丁裏打ち補修済み、保存状態良好。

右の文章はなかなか要を得ているが、ただ「浮世草子」は如何であろうか。確かに享保十四年の年誌と「好色」を冠する題名とからは、そのように認定しておくのが無難ではあろうが、一方でこの時期浮世草子を意識するならば、仮令刊行を念頭に置かなくとも一部が五冊ほどになるように執筆するであろう。そして次に全体を翻刻紹介するが、文体も浮世草子一流のものとは明らかに異なる。これを分類するならば、一冊本でその内容の遊里、傾城、嫖客の論に終始する点から、洒落本とするのが最も恰当であろう。無論この分類は後世の意識よりするものであるが、今日洒落本の嚆矢とされる『両巴厄言』は既に前年に刊行されている。本書もそのような時代の機運が生み出した作品と見ておきたい。そして初期洒落本と認められるならば、本書の存在はそれなりの問題を提起するであろう。

先引の紹介文中にも本書の書誌は記されているが、翻刻に先立って改めて簡単に記しておく。

大本一冊 写本

表紙 白茶色。三〇・一糎×二一・五糎。

題簽 欠。表紙中央に「好色残香草 全」と墨書。

構成 序一丁、本文三〇丁。計三二丁。

序題 「好色残香草序」。

内題 「好色残香草」。

匡郭 なし。

丁付 なし。

字高 約二六糎。
行数 半丁九行

以下、翻刻に移るが、左記の要領によることとする。

- 漢字、仮名とも、原則として今日通行の字体に従った。合字も通行の書き方に改めた。
- 虫損箇所は、判読できるものは特に断らずに翻字し、判読困難な箇所は□を宛てた。
- 序文の句点は、黒丸点を白丸点に代えた以外は原本通りである。本文には句読点はない。通読の便宜上、私に補った。
- 濁点は原本にはほとんどないが、そのままとした。
- 丁移り箇所は、原本の実丁数を算用数字で（ ）内に記した。
- 改行、闕字は原本に従った。
- 明白な脱字と認められる箇所は、（ ）内に当該文字を補った。
- 明白な誤字と認められる箇所は、当該文字の下に（ ）で括って本来の文字を示した。
- 前記以外の文意不明箇所には特段の処置を施さなかった。
- 原本の訂正箇所等は、その都度、当該箇所の下に（ ）で括って注記した。

つれくゝなるまゝにねら〔れ〕ねは。諸夢もなし誰とふ人もなく。かんこ鳥さへ近付す。独書籍に向へとも。神佛の三書は。目かとゝかす。外の書に懸れと是も。哥書或は医書。其外みな四角三角の文字にて。手に取る斗よむ事あたわされは。いとゝさひしさまさりきて。心の通行まゝに世中の。なくさみほめたりそしりつ。独たのしみ。思ふことのはかきしるし。片言（1オ）まじり取付。引つゝけ。文字の清濁も。たゞしからねと。逆も人の手に取る書にてもなし。言統て残るものには。香斗と。直に題号にするとしかいふ（1ウ）

好色残香章

一度願かへりみれは城しろをかたむけ、二度返へり見れば国をかたふくるとは、しさいらしき儒者しゆしゃか局女郎くわねをかふてふられ、その時言出したると見へたり。今は女郎かいの痲けんま癖、是か謀の毛を吹まて疵きずを求るなるへし。先傾情の有かたさは、筆の先せつかいになりてもいゝつくされす。白粉なしの素顔すかほのうつくしさは、ひいとろをつらすにそのまゝ天人（2オ）の欠落かうちもの。白く赤くその爪はつれしほらしさ、弥陀の御妾くんにんおんせし、観音勢けんおんせい至も連台れんたいを捨て極楽ごくらくへよみかへりし給ふけしき。すあしに京そうり、いそきもせず、金持の若隠居わかいんまてら寺まいりと言足元を見て、てんとたまらぬと言出すと最早魂はやたましいは古もの店たなに有物と観念して、達た戸ま同せん、芦あしの葉はにのり乗りては空を飛とひ、大鞍末社たいまつしやの口をたゞくを能事と心へ、巷口ちやうぐちもいふて見たしと、生れも付ぬひんぼ神の（2ウ）まね。親兄弟の異見いふもかまいなく、茶屋揚屋の亭主、近年仕出しのほりぬき井戸へ天窓をつゝこみ、女郎もよほとなしみ手にいるたんなりては、いよゝおやの異見とうふ売のあいさつ。親兄弟のおそろしき顔と、女郎のすい付たはこ出す手付を見くらへては、古金に見せても女郎のかたを取な□筈なるへし。夫からは五節句も独して請込、外の客の見へる時は態とひそり姿に（3オ）見せかけ、もらいにかゝると成程いんきんにいふて、とかく女郎を膝本に置たき心。大豆ちよく程の盃で、いけもせぬ曲

のみ。女郎かふるかよさしやんせ、茶屋揚屋の亭主かほめそやせは、夫に乘て引請く吞つふれ、床へかき入らるゝ時は極楽へ行夢心なるへし。女郎はねまき着かへて、鼻の御遷宮へぬけ参するやうな匂、一夜着にはいりてかの里の床の上手をつくし、御目かさむればまたやりてかもんさく。金銀の(3ウ)華をふらし、宿へ歸りても女郎か目の先を百度参りする心。半日宿には尻かすはらすして、行歸りては又乗かけ、それかかうして淫酒の二つに身をいため、越後の法印夕立に逢ふたやうに成ても君の事はわすれしと、しぬるまでも女郎の事を思ひ、さい河原のくるしみは通るゝ共、大事の命を棄袋なしに捨る事よと、しかみ火鉢と見違ふやうな兄きかしかれとも、そふも(4オ)ならず。たゝよいほとにかけんして女郎も買た□よし。さりとはかけんのならぬもの也。なるほと口にては利口に言廻しても、尻はひたく。誰吾人はをいやとは、釈迦も鱷も言はせまい。神道者は大坂船の旅人に似せ、儒者は奥家老の二はんはへ〔に〕似せ、僧は長羽織にて、寸関尺さへしらね共、医者顔するも、みな落る所は是一つ。肴くわすの行はなる共、是せずにくらす坊さまは、世中に(4ウ)見覚はあるまい。口舌せんと思ふて思案をかため行共、女郎の顔を見るとくらりとちかい、只ほうへたへ喰付たきは人情のならない。扱く是なくは今の人民生てはいられまい。此うちよしあし御ひらきなされ。

傍に福田といへるゑせもの有て、なるほと一々至極。然共、女郎に真実か有か無かのわけしれはいかに。

謹に失念せしものかな。女郎の真実は言に(5オ)及ぬ事ながら、あらまし御咄申そふ。まつ女郎買にも大分気苦勞有。女郎も客の真実を見れば、木石にあらす、我を思ふてきやんす客しやと、にくかう苦なし。夫ならば真実もあるといふもの。そのうへ馴染重れば、ゆひ切、髪きり、起情を書、生爪をはなし、氣に合ぬ客なればふり付、とつて行にし見るめもかなしきくらいにひといいもの。それゆへ

しはらくく、前より只今迄の内にすめぬ事有。(5ウ)親の異見聞ぬとは、あたまから女郎に打込故。女郎は当せんの慰ものと心得、いきとはりとかま〔ひ〕なく、買ふてしまふこそよけれ。いらさる儀利立して外の客をふ

せき、我独請込てするは余りはなげ。迎もひとり守りては居ぬ身のうへ。それほとならは根引にして、女房にするかよし。やくに《「に」は傍書による補入》たぬ女郎の買論《「論」は「輪」を訂正して傍書》故、淫酒の二つに仕付られ、身代も棒にふり、はては命迄とうとい所へやらるゝ事、先祖ゑのふかう此上のあるへきか。是則色欲(6オ)におほるゝと言もの也。色を《「を」は「は」を見せ消ちにして傍書》好といふにはあらず。道因法師の哥に

思ひわひ扱も命は有ものをうきにたへぬは泪なりけり

恐れ多きたとへ事ながら 伊奘諾伊奘冊の尊は、天の浮はしの元にて、みとのまくはいなされしより、今の人民ゆたかにくらす。さりし法師も、色このまさらんおのこはいとそうくし、玉の盃そこなきに似たりと書残したり。これ(6ウ)みな色をこのむと言也。道因法師か淫乱なるにはあらず。好色と言物は夫に引かへ、色欲と言は人の妻をおかし、下女はしたをなふり、そのうへ傾情におほれ、はては命を失ふ。遠くは唐土いんの對《紂》王たつきにまよい、近くは高のもろなを、塩冶判官か妻を思ひわひて人を損せしためし、是道ならぬ恋故也。恋と言ものは格別なるもの、あなかちに交合する斗を恋とはいわす。遠き雲井を思ひやりて、あわてやみにし(7オ)うきを語るなど、恋の情とはいふへけれ。ほかはみな淫乱也。併男女交合やむれば、天地の理に背き、子孫断絶する也。さにはあらず。只淫乱をつゝしむへし。かくいゝなは、遊女町へは足もふみ込ましきやうに聞へけれとも、あれは慰物にこしらへ有物なれば、金多くつかわす、人にかまわす我斗の樂しみにして帰るこそよし。人の上をこさんと思ふと、金銀も多く懸り、身もほろほす。とかく人の(7ウ)妻娘下女をおかさぬやうに行給へ。さりとはつゝしまれぬもの。夫をつゝしむか肝悪《要》。然ともつゝしまふとするは大体苦敷ものにあらず。とかく山林も引こまんと心させとも、是もさひしからん、又色もあるましと思へはいや也。返すく面白らしきものは傾情に極しと、人の上をこす事を求す、只己か慰とするやうに樂しまは、此上なしの詐物より慥、サア一買かわんと思へは、それ

く／＼の付届、いろ／＼の金か入、針を（8オ）山に積てもたまらず。そうなると慰は棚へ上て、気苦勞か世話をや
 く。恐れつゝしむへきは傾情。殿中のつれ／＼に思出し、独楽しむも傾情歌に

傾情はけいせいなるそ傾情を

只傾情とおもへ世の人

とかく傾情に真実はなし。爪をはなし指をきるは大事の伝授有。殊さら起情の血、聞てはおそろしい事。先指をき
 ると（8ウ）いふ事は、あの客を取はなしては、目に見へて明日よりさひしうなるほとに、指にてもきり、留らるゝ
 だけは留てみやれと、親方と相談のうへ、医者をやよ寄せ、味噌汁鱈ふし用意して、偏に産婦のこたくさわき、下
 女共はそはへよりて、氣を髓に御持なされ、只ひと思ひに御切なされとすゝめられ、右の手には神天の名号と人參
 のせんしからを持そへ、地こくへ落る心地にて切たるものを、大事（9オ）そうに綿に巻、蒔絵の香箱に入、きん
 いろのふくさに包、ふみそへて送る。見るよりはやく親の位牌より大切にする人、まゝ多し。爪をはなすも右に順
 してしるへし。殊に起情なと書には、ふともゝを吸ふて血を取、或はあかねに漆をませて付れば、始は赤く後は黒
 くなるよし言伝あり。又あの世へ片足ふみこんて居る禪門、田舎そたちの男、みかきやうしは茶湯の道具と心得、
 珊瑚（9ウ）珠はほうつきのかけ干と覚へたる男に、何の見当有て起情を書てやり、そのうへ松の木のため塗、八
 參殿の「の」は傍書による補入はり印を見るやうな身と、雪のはたへと、ひとつにいたき合、大象のたわむれ
 もかくやと思ふ風情、女郎も随分虫強くなければならぬせうはい。夫より御仕着の文をこす。あらかた
 すたりしはゆる／＼と御めもし、何の風情も御座なく、御残り多くそんしまいらせ候。いよゝ（10オ）御きけん
 よく御いらせ候はんと、かすそへ御うれしくそんしまいらせ候。わか身事も、さりしに替りなふつとめまいらせ
 候まゝ、はゝかりしも御きもし下されましく候。とかく遠からぬ内、御しゆひ御見合御出、まち入まいらせ候。
 くとふは御けんと、めてたくかしく。

といふに少しつゝ、手二はの少しつゝ違ふと言斗、さりとは同じ事也。手間ついやして右の文言を板行におこし、沢山にすり置、逢た(10ウ)客ことに、安売の札をくはるやうに達者な男四五人雇ひ、老枚宛くはらせる方手□よかるへし。夫を文枕にこしらへ、うれしかりてするもの多く有。夜深寝入て借金こいの夢なとみるもの也。是みな女郎にほれる故也。惚れる訳有。染こんで惚と、一返に惚と、二色有。一遍に惚れるは、女郎買て酒のみ、楽しむ内は随分惚で、宿へかへればわすれ、行は又惚れるこそ、寿命はのひて慰に(11オ)はなり、金は多くつかはずに濟事也。サア染こんで惚れると、宿にはつなみの打も構はず、女郎の顔かちらくとしておよき出すものそかし。よくくゝつゝしむへし。分てやくそく杯するものにあらず。言かけられ引ればせまい、後は閻浮の塵ともなれ、又一つ計は大事も有まいと、無用の、慰にもならず、只はり合一返に金をつかふ。かならずくゝ女郎に儀理はなし。委しくは先にて申そふ。(11ウ)扱又儒者、神道者、大坂船の旅人、奥家老、僧、医者、色々行かたちを互にかへる事、有へき事也。商人もはしめは商売をいわす。職人も我職をあからさまに言もなし。然れば僧医者となりてもむりならず。時の心に依て、僧俗共に此道は、若間の楽しみに有苦の事也。学門手習に気のうつしたる時、女郎を買す共、只慰に成物に行ましき物にあらず。則氣を転す。敢てそしるへからず。年老イ(12オ)てこそいとしゆしやうなれと古人も言残せり。とかく若内は何もかもして見るかよし。つゝしみつゝしむましきはその人の心に有事。此方より押付ていわれす。

いやく、さやうに仰られては、女郎を買んより宿に居て、味噌塩の世話するかたかはるかまし。金銀沢山に蒔ちらし、小者下女迄も、かゆい所へ手の行ことくまわらねはおもしろからず。同じあんと出すにも、針の穴たられ(12ウ)禿共か手習、ねふたく思ひまいらせ候かしくとおかしく書ちらし、ふつまり成人形の頭杯、ひつけふ人宿のさひしきやうなるもの。吸物碗もまろくなるは出す。おしきせの朱塗の膳もふちのかけたるを、「を」は傍書による補入《出し、ねとうくもはく物に所々何やらしみ付、さもかなしく、冬むきは宿へ帰り、敗毒散拾四五ふく

ものまねはならず。いやはや局女郎を買ふた心とは及もなし。又女郎の指爪髪を切、起情をかく事、真実なきに（13才）似て真実の要あり。くはしく申へし。耳をそは立聞給へ。起情は尤ならいにてかくとは言とも、訳しらぬもの言出したる事。是は客の気を見て書てやる也。何程女郎か逢たふ思ふ客にても、この客うたかい多く、迎も女郎といふものは真実なきものと一筋に吞込、つゞけては買す、外の女郎に乗りかへる心の有客には、女郎逢たふても外へ行はあわれぬゆへ、うそにも起情をかき、客に真実に思はせ、（13ウ）とり留て逢ふなるへし。起情はうそなれとも、そのうその起情をかいてやりて逢たふ思ふ心は誠也。故に起情はうそ、逢心は誠ならずや。又年よりし男、田舎のむくつけ男にも指爪をはなし、或は起情書てやる事、是も一利有。年寄し身を、勤なれはこそ御逢なされ、定て若客に逢たふ思召れん、今一度若くなりてあの女郎衆に思はれて死たいと、せつかく願入し珠数（原本「数」に玉偏あり）の玉も、むなく袂の内（14才）にくちはて、もへきの衿巻も黒縮緬に替ると、随分女郎に思われたき心、是にては後世も取はつすへし。此故に年よりし身の勞するを休んと、御年よられしとてなりかたちに はかまわす、心真実さへあれば、何かさて大事の御用をさし置き通ひ給ふ客衆かにくからふ筈はなけれ共、年よりの癖にうたかい多く、あれもうそ、是もいつわり、なにしに心か真実なれはとてとしより男かよからんと、いよくさり馬に（14ウ）なる所を、かの指爪起情をしかけ、うたかいをはらさせる也。是もその起情指爪はうそなれとも、かたちには惚ぬ、心にほれたといふ真実を見せる所は謠也。田舎のむくつけ男も同事。サア返答有やいなや万事物をうちはいふたるかよし。言かなんと言すこし、わさわいをもふくるものそかし。其方か言し女郎屋はとけんの見せる所はなし。金銀つかはねは、あんと、寝道具、（15才）其外ろくな物は出すと言しか、夫は情を商ふといふにはあらず。情と言ものは格別。禅門田舎のむくつけ男に、心をやすめんため起情を書てやるとは、かたはらいたきせんさく。然らはなせ気まゝをはたらき、間夫をこしらへ、大切なる金銀を遣い通ふ客をものゝ見事にふり付、さひしからす心は非道にあらずや。まことかたちには惚れす、心にほれるならば、床の首尾を濟しそ

な物也。サア金遣ふ(15ウ)客と見ると、淀の水車も、草鞋取る間も、錢こまはたしになる間もないほと客に廻り出し、酒も思ふさまくらい、扱床人も用事に久しくかゝらす、ともかくも御意次第。灸のふた、たはこの火、ハアのとかがわく、あいさゆ、耳のあか、畏たと、それはく《原本「それくは」の「は」を抹消、「それ」の下に「は」を傍書》、いたはしき程の廻りやう。客もそれよりは面白く成、もと知らぬ三味線をかゝへ、随分小さいらしく、万貫目持の若旦那のはぶりをして見せ、(16オ)内へはいる時は、こそくと鼠の穴へはいるやうにして、女郎の事をわすれず。小宿へ着替出し置、内をは何喰ぬ顔、亭主は六ヶ敷相談有やうにもてなし、手代は掛取に行ふりをして出かけ、着物着かへて船籠に乗と、跡は分散になるも構す大臣顔。茶屋揚屋かはいつくはへは鼻てあしらい、小杉の三つ折を自慢らしく懐より出しかけ、やき付の目貫もむくの金と思ひ、さんこしゆも(16ウ)預ものてせいをつき、とかく大たは。人参座の二はんむすこと見せかけ行もの有。又なりふりにもかまわす、隙さへあれは不断のまゝにても、ちよといて顔見てかふと、二度に老度はかちはたし、茶屋揚屋をはよそに見なし、道行に遣ふ金を女郎にやりたかるもの有。はその客の心く、よしあしも付ら〔れ〕す。然共、大きく出れば物入多しとしろしめせ。内にては唐臼にうき目を(17オ)かなしみ、或は草鞋を守りにして居る男にもはひつくはふは、みな金といふ一物故也。その人の用る金銀を、女郎買ふに砂石のこたく遣ふ事、金の冥加にても末はよからし。己か知分相應に、人は万々貫目遣ふにも構す、手前のねちふくさに金の一つも残る位に遣ふ方かよし。小元手の商人、安給金取りの手代なとか、大臣顔して見せたれはとて、一度か二度ではもみとられ、後は魯の羽織も(17ウ)いつしかさいみのかき染に替り、金こしらへの脇差も馬皮のきせる袋に成やうにては、人に面もあわされず。自分相應に金もつかい、人もたをさす、身もほろほさぬやうにし給へ。女郎のうそと謙とは、やふれかみこにやれあみ笠にならねはしれず。女郎をいつわりものと、客の身としてせひるはつたなき事也。多くの客に誠はならぬもことわりそかし。馴染の女郎のかたへ行、(18オ)折にふれ客有て差合、かわり取てもおかしからすと、わきへ飛ぶ所を、

かの女郎とらへて茶屋へ引すり込、たゞいつつめつゝかみをむしり、其上ならいの泪をほろりとする時は、孔子も周公を髣髴たるを「を」は「に」を抹消して傍書見るによしあらん。客は此一手身にしみ／＼と嬉しく、夫より深くなり、面白かるも有。若輩に思ふもあり。万客万心を毒／＼わけて間を合す事、是計はてんと釈尊も靈鷲山てねむけか（18ウ）きそうに思はるゝ。ものみな間に合ふ事を、よくたんれんしたるをほむへき筈なるに、女郎に深く惚に依て、無生にはらか立也。金つかわすにはゝはならぬものなれと、はゝをせまいと思ふて女郎買ふかよし。こふ言たらは又氣詰りといわんか。氣のつまるは女郎に深く惚れ（る）故に、はゝか見せたくなりて金か多くいる也。女郎にほれねははゝもいらす。只手前の分限相応かまし。（19オ）はて万貫目持の真似かしとうても、手になければならぬやう成ものにて、はゝをするに大臣と同じ事はならぬと思ひ、下手に廻り、やくそくもへらをつかい、外の客へすり付るか本粹といふもの。また人のうへこしてはゝをみせたい心の有内は、皮かとれぬと思しめしてよし。根から女郎狂をやめよにはあらず。女郎を買はねは世間の付合もうときもの也。はまらぬやうに、手前独の（19ウ）なくさみして帰るこそ、節法のかくし手、すこしツゝ女郎を買給へ。蘇子瞻も、男女の淫楽は互の臭骸をいたくと言残せり。是も又あまりなり。前言ごとく、男女交合は、臭骸にても何かいにて、なければ今日か立ぬもの。東坡も是ほどの事は、氣の付かぬと言事はなけれ共、深きいみの有事。武士の心もやわらせるは歌のみち。とつとむかし／＼、ちゝは山へ柴かりに行時の（20オ）事。今は歌よりうつくしきかりやうひんも、へその紐を上まへに落すやうなやつに、しろりと見らるゝと、金時か甲論のつらつきも、忽わらに懸りたるなまこのことくに成はすてられぬもの也。然共ふかくはまる事はいらぬもの。慰物と斗心得給へ。兼好も、大福長者にならんと思はゝ、かりにも無常をくわんすへからすといへり。女郎かいても、仮にも無常を思わぬかよし。内証ははたか坊主。（20ウ）全盛なる女郎ほと内はひた／＼。遊女町の質屋は、三拾目か質物あれば、五拾目も六拾目も借してやるは、一度に利を取らん為也。中間の部屋と女郎ほと、質をおいたり請たりするものはなし。簞笥もしかけ計、古小袖か式つ三

つ、述紙か七八帖、もろあしの干物か四五枚、鯉ふしか半分、しめをきらぬ扇子か式三本、まめ人形か五つほど、銭か百五六拾、大かた此くらいのも物也。随分人から作りても、裏店(21オ)茶せんうる人よりも内証の苦しさは、四月時分には拾もなければならず、帷子もほしく、節句まへにはなる、小間物や二の舞の面を見るやうにして詰かける、たはこやは釜の前にはいをせゝりてまつ、こふくやは綱か羅生門ゑ行し心地にて、はしこをにらんで立いたる、其外雪駄や、紙屋、入替り立替り、地こくの責も外にはあらしと思ふ時は、指爪起情書で、おし付わざにしんそ(21ウ)命もしんせませうなど、いやはやおかしきせんさく。とうて掛乞に取るゝ命を、手よく客にくれるとは恩にきせた事。夫よりまうけにして、さては此心かと嬉しかり、はや金式三両もやれば、それを目に見た計、すくに掛乞の方へ内渡し。是てもしさいらしく爪かくしの京そうり、内証しらぬ目からは尤そかし。又爰になんと食といふ事あり。客の帰りにて後、同じ友の女郎四五人(22オ)寄て集銭出し、禿を下へめし取にやり、かの筆筒の干物を出し、火鉢にて焼、夫をくふて楽しまるゝ。それでも客のまへては、五こくは喰す、木のみかやのみ計くふやうな顔付。そのうへ、酒はとの井戸から吸へ汲てくると、随分初心らしう見せても尾かみへます。夫にうかくゝたらされ、節句前にはつたて尻して泣時、書ておこす起情を大事にかけて、守り袋もよろこはるゝ。さりとはよふした(22ウ)ものそかし。女郎能き客有りて、金も多くもらへは、又それゝに付届多く入て、それたけの物入は有そかし。又安女郎はよい客もなく、銭もなき故に、付届もさのみいらぬ也。此時無常をくわんすると、身代はとまりさためぬあま小船、忽負方へ取られ、手と身と、てつとんと三味線引てもくらされます。其時節女郎を頼に、もはやそこゝにあしらい、跡は小歌でとりあわね(23オ)は、真実の無いものとその時知るへし。とかく金銀故に女郎も惚ると心得、また客をのほす一手有。先女郎と二人、酒なと吞て居る所へ、外の女郎来て、若かりうさま、夕凧の夢か当たの、せうねさまてうれしからふといふを、こちの女郎、またわることな事言て人にいやからすのかへとて、外の事いわすに居れば、扱は夕凧の夢とはおれか事を夢にみたそうな、それほとおれを(23ウ)思ふも

の、爰は買てやらんと、殊之外登るもの也。今時は、いとしいの河合のといふ、へつたりとした事にては、中々客も合点せぬなり。とかく女郎に思ひつかれたき風俗のしたき時は、貧乏神を主とりしたと思ふてつゝしみ給へ。客もあたま付をこのみ、色々のもやうをこのむ時分になると、客たましいは女郎の内懐にていしゆして居るもの多き事也。木の虫(24オ)は木より生て、しかも其木を損さず。女郎も客故に生して、しかも客をそんさず。今更驚くへからず。女郎屋の斑猫は、そろはんと、六ヶ敷親仁と、主を思ふ手代と、りんき深い女房、大方この類也。祇園しやうしやは石すへはかり残り、つき／＼しき家もいつしか売居の札のみ人目に懸り、跡にてはうらめしげに白眼で通り、人の科のことくはら立る事、本の後悔先にたす。鉦打でもあるかれ(24ウ)す。黒羽二重の袴もあか染て、木綿布子よりおもくなり、すきやせんにて美食を尽したるも、買味膾の大こん汁を舌打してたのしみ、鼠のあれるをかまわす。一年中過ても油燈心はいらず。いにしへは至り姿《「姿」は「盗」を抹消して傍書》、素足に中貫そうり。今も素足にわらそうりなれ共、心いきの違ひたる事、愛岩山の大天狗とおふく《「おふく」は「おく」を抹消して傍書》ちやうのめんほととの違ひ。是にてはくらされしと、せつない余(25オ)りに、かきも習わぬ駕籠の棒。いつとなくこしもすはり、乗たる身か人を乗せるか、此善こんによりて、来世は又人に乗せられんとあきらめるより外はなし。式文の小麦焼にさひしきはらをなくさめ、銭五拾文とれば百度もいたゝいてちいさき神棚へおさめ、銭湯へも一ヶ月に壹返、其外はみな井の元にて水行水。此時の苦るしさと、いにしへせんせいなる時の姿《「姿」は一度書いた文字を見せ消ちにして傍書》は、人目には(25ウ)替れと心は同じ事。節句いゝかけらるれば、小棚壱つつる事も大普請のやうにいゝなし、無心顔の見る時は、阿弥陀と合図して居るゝ親仁をきけんわるいといゝなし、まわし男かわらい付くれは、金持あわさぬ事をかすらせ、ひとつとして心の休まる事もなきに、かの里へあしかいたくなりしもいんくわそかし。万事はみな手前の(26オ)

是しはらく待てたへ。女郎の間夫をこしらへると、客をふるとは深いみ有。女郎といふものはほんの流の身にて、

いつくをさためぬもの。客も多けれ共、末くは女房にしよふと口にては言とも、男の心と無尽の相談は夜間に替は、客はふかくたのみならず。なんほ客に真実を見せても、皆うそくして済すゆへ、間夫といふものこしらへて、勤なしに逢ふを真実にて、若よきかたもない時は、(26ウ)彼間夫と夫婦に成仕舞の片付所なり。又客をふること、女郎の思ひつくふうそくに、しかも大粹と見せて来る男、旅にて慰みと、首尾よくあへは一二度でつききれるゆへ、一二度もふり付、客に気をもたせて取留て逢也。又形はよくても、座敷にて粹立し、女郎を廻し懸るは、こらしのためにふり付るそかし。地の客も右に同し。女郎とても人間なるものを、思ふ男かなふて(27オ)叶はぬ筈。それよりも

いや是わるいりやうけん。夫は真実ではなし。身をかかわゆふ思ふから間夫くるい。色でも恋てもなし。身を大事に思ふから。これらはたますのうわもり。又客を

はてそうてはこさらぬ。色も恋も身か有ての事。身の納りを極めねは恋もならず。

いやくそうてはない。恋ゆへに用明天王は牛(27ウ)飼になられたか、其外身を捨、或は望夫石となり、又は二人さしちかへ死するも有。身代捨て逃るも有。よい所の縁付きらふて手鍋さけるも、みな是

いやはおかしうてたまらぬ。それは恋ではなし。みないたつらといふもの。

是御待被成。そのやうに人の言事を御けしなされな。

けしますればなんとゐたした。(28オ)

そんなら間夫をこしらへて、真実もなく、身のかたつき計思ふか本恋か。前いふたのかたとへ恋てなく、いたつらにもせよ、惚逢ふた真実は慥に有てはないか。傾情の内またかうやくてはなし。

余りけんく仰られな。女郎買ものはみなあほふか。

たわけてはなけれ共、大きにのほされて金つかふは、大たわけと伝へ聞もろこし感陽(28ウ)宮の、その

やあ講釈聞たふなし。

いやさうぬめ、口かすきるそ。傾情は手のよい盗人さ。

盗人とは頼けたくたかるゝか。

其方はまた女郎の盗人といふ事をしらぬか。今も吉原土手の事を三やき野と言は、いわれはな、跡にては瓦をやき、右は死人をやき、左は火こそやかね、客をやくやら、(29オ)はくやら、はめるやら、又それにやき手と言もの有。それ故瓦をやき、死人をやくと、客をやくと、集て三つ焼といふ義理てみやき野といふ。古人も女郎はうそつくものに極ておかせられた。とかく客をたらしして金銀を取る故に、人からのよい盗人さ。

りやうけんのない事言ふな。女郎か金もらはいて、何て過ると思ふそ。客は金を女郎にやるに極たものさ。(29ウ)やい、相「相」は「逢」を抹消して傍書」たいなら客をたらしすに、実に言かけもろふたかよいわい。とうて女郎は盗人に極た。

なんほいふても女郎は盗人しやない。うぬは盗人

なんしや盗人とは。

はて色盗人さ。

のふといやつ、あきとはなそふか。

横頬ふまふか。(30オ)

ふんてみおれ。

あこはなしてみよ。

けはなしかねふか。

ふみかねやうか。

互「互」は「誰」を抹消して傍書にせり合し処に、傍にふんろうといふもの有て、しはらく。両方共御しつまりあるへし。我等は此近き所にかす〔か〕にしてくらすもの。先ほとよりの論、一々次に承り、何れも一利ツ、有。面白ふ候へ。我等も(30ウ)二十字年来野傾の二つに身をひたし、今金つかはねと、茶屋揚屋はいつくはい、少しおはもしに思はるゝくらい。只今迄御兩人言つものり、口論となりて埒かなし。是から我等、及すなから判者して、御兩人の思召、何にても仰られよ。少しも依怙なく、利とききかせんと、いふかと思へは、夢はさめて失けり。扱面白き夢中のつけ。ひち枕にねむりをもよおし、夢のつけを待ふ(31オ)よ。夢のつけを待たふよ。

享保十四年酉九月吉辰

梅沢氏作書(花押)

(31ウ)

以上で翻刻を終える。なお本書の字体には多少癖があり、誤読の虞のある箇所無きを保しがたいことをお断りしておかなければならない。以下には多少の覚え書きめいたものを書き付けておく。

本書の作者は、末尾に「梅沢氏作書」とあり、序題下に「梅月堂」とあるのもその人であろうが、皆目見当がつかない。さる研究会で本書を紹介したとき、武士階級の人物であろうとの御指摘をいただいた。八丁裏に「殿中のつれくゝに思出し」とあるあたりにその素性が伺えるかもしれない。そうであればこの時期の戯作にもふさわしいが、今はそれ以上のことは不明である。

次に本書が作者自筆本か転写本かについても決め手に欠ける。ただ転写を示す記述は見あたらす、本文中の訂正箇所なども、誤写の修正よりはうっかり誤記したものを直したように思われて、どちらかといえば自筆本のように思われるのではあるが。本文冒頭の二丁だけは律儀に仮名を振っているが、以後は面倒になったか、抛棄している

のは書写者の所為ではなからう。但し何れも無論決め手にはならない。

さて、本書を紹介した主な理由は、言うまでもなく、洒落本と認定した場合、その成立年次の古さである。享保十四年は、冒頭にも述べた如く『両巴卮言』刊行の翌年、その続編たる『史林残花』刊行の前年に当たると。本書も末尾近く「吉原土手」の語が見えて、刊本の両書同様江戸出来の作品たることは明瞭であるが、この成立年次自体に疑問の余地はないであろうかということも問題となるかもしれない。しかしこの点については、明らかにその年次に抵触するような記述でもない限り、記載された年次を信用するしかあるまい。そして筆者の管見ではそうした記述は見られないと思う。

本書中明白に年代を特定できるような記述には乏しいが、三丁表に見える「近年仕出しのほりぬき井戸」は揚屋尾張屋清六方に掘られて評判となったそれであろう。この掘り抜き井戸が掘られたのは、享保十年五月のこととされ（注）、本書を遡る四年前、当時としては十分に「近年」のことである。その他揚屋の存在が当然のこととして語られていたり、「なんと食」「やき手」等、『色道大鏡』に解説されるような古風な語で、後世ほとんど用例のないような語の使用も傍証となろう。何よりも享保十四年という年代は、今日的には洒落本、乃至戯作の揺籃期として注目されても、近世期には偽作を試みるような魅力を持った年代ではない。

化政期以後江戸で流行した考証随筆は、近世初期の江戸を重要な対象としたし、中でも吉原は多くの興味を引いた。そこに乘じて古版の資料に見せかけたものも偽作されたりしたようであるが、せいぜい百年程度の過去でしかない享保期の、細見のような資料的価値を持たない本書の如きが偽作される可能性自体が先ずなかった。

従って本書の成立は、末尾の年誌をそのまま信用するとして、これを初期洒落本の中に置いて眺めると、先ず目につくのはその和文で記されていることであろう。『両巴卮言』、『史林残花』、更に同系統で男色を扱う『南花余芳』（享保十八年）、何れも漢戯文体であり、江戸ではその後下火となるが、その勢上方に移り栄えたものが、まずは洒

落本の正系と言うべく、装幀や序文に後々までその痕跡を留めるといのが、凡そ今日において常識とされることろであろう。一方少し遅れて今日初期洒落本の列に加えられている和文体の作品は遊女評判記の脈を引くものが多い。しかるに本書は、むしろもう少し後の色談義や、安永期の論議体洒落本を思わせる。無論色談義は、宝暦元年『当世下手談義』以後の狭義の談義本の後に生まれるものとする、本書とは無関係で、直接的には野傾野白の論をなす浮世草子等の影響であろうが、ともあれこの時期にこうした作品が作られていることは興味深く思われる。

次に本書は二人の人物の議論の形式を取る。そのやりとりは基本的に口語体ではないが、最後に至ってそれが見られる。もっともそのやりとりの部分は、書式から見ても台帳を思わせるが、通常演劇本形式の模倣は正系の洒落本が上方で発達してゆく中で生まれたものとされており、播籃期の江戸でこの形式が見られることも注意されよう。また本書には遊女や嫖客の内情の暴露、後の作品に所謂「穿ち」が多く見られる。これも遊女評判記や浮世草子などにその先蹤はいくらも求められて、敢えて異とするには当たらないかもしれないが、これも後の洒落本の眼目の一つが早くもこの時期に重点を置かれている点、やはり注目しておいて良いであろう。

本書は刊行されていない。作者にもその意図はなかったであろう。もし自筆本であったなら、ほんの手すさびとして書かれたものが、そのまま筐中に秘められて伝世したものかもしれない（本書には蔵書印の類が一切ない）。同時期の刊本は、比重はともあれ、書物としては細見と一体であり、また少し遅れる和文脈のものは遊女評判記に近いことを思えば、そうした美用性のない新しい遊里文芸が刊行されるような時期ではまだなかったであろうか。そして今日『洒落本大成』の始めの方の巻には、同様に刊行されなかった作品も多く収録されている。それらの中には後に時至って版本となったものもあれば、そうならなかったものもある。しかしその差は必ずしも作品の出来不出来によるものではなく、たまたま出版関係者の目にとまったかどうかという偶然に左右されているところも多いように思われる。播籃期の洒落本はその性質上、そのまま刊行されるようなものでなかったとすれ

ば、こうした未刊の作品にも十分注意を払う必要があるうし、なお多くの作品が埋もれている可能性も高いであろう。そうした作品の発掘が待たれるところではある。

(注) 井戸掘削の年代は、花咲一男氏「吉原年表稿」(『続 江戸吉原図絵』所収)による。